

高校調査書及びアドミッション・ポリシーで重視される内容の比較

—高校調査書「指導上参考になる諸事項」に記載されている内容の分析から—

大久保 敦 (大阪市立大学・大学教育研究センター)

高校側が送り手として生徒に込めた「期待」と、大学側が受け手として入学者に求める「期待」とを比較検討するために、高校調査書の「指導上参考となる諸事項」の記載と大学のアドミッション・ポリシーを比較した。その結果、記載率の高い上位5位までを比較すると、高校調査書では「人間性・良識」、「生徒会・委員会」、「クラブ活動」、「努力」、「資格取得」であるのに対して、アドミッション・ポリシーでは「基礎学力」、「目的意識」、「専門への興味や関心」、「教科学力」、「実行力・実践力」となり、両者の傾向に顕著な差が認められた。

1. はじめに

大学入学者選抜において出願書類として提出される高校調査書には「指導上参考となる諸事項」という自由記述の項目がある。ここには一般的に出願者の学力、能力・特性、性格、態度・意欲、興味・関心、活動などについて記載されている。大学側が出願者を理解する上での重要な情報源となるが、経験的に出願者のポジティブな面が記述されることが一般的である。したがって、これら記載内容は高校側（特に担任教諭）が大学に対して出願者を売り込む際のアピールと解釈することができる。つまり、高校側の出願者に対する「期待」が込められている。一方、平成13年度大学入学者選抜実施要項（文部省）から正式に位置づけられたアドミッション・ポリシー（以下AP）は、大学にとってふさわしい入学者を受け入れるための方針をまとめたメッセージである。つまり、大学側の入学者（出願者）に対する「期待」が込められている。

ところで、高校と大学の間には接続に伴う各種の問題が常に存在してきた（荒井，2005）。これらの要因は複雑で一概に述べることはできないが、高大双方の関係者からの日常の話を聞いていると、高校と大学の間で入学者（出願者）への「期待」に関して温度差を感ずる

場面が多々存在する。したがって、この「期待」に対する温度差が高大間の問題の一因となっているのではないだろうか。そこで、はたして両者の「期待」の間に温度差が存在するのか、あるとすれば具体的にどのようなことなのかを明らかにすることを目的に、ある公立総合大学を対象に高校調査書の「指導上参考となる諸事項」に何が実際に記載され、何が重要視されているのかを検討した。続いて、大学が提示するAPの傾向と比較検討を行った。さらに、全国大学のAP記載内容の傾向についても合わせて比較を行った。

2. 調査方法

公立A大学平成14年度入学者が出願時に提出した高校調査書の「指導上参考となる諸事項」に記載された文中から、APに関する項目に該当する内容を拾い上げ、その記載数（率）を求め記載内容の傾向を分析した。なお、APに関する項目は鈴木（2002）の全国の大学ホームページに掲載されたAPを基に作成された分類表を基本的に用いたが（表1）、APにはなく調査書独自の記載項目が存在するため、適宜項目を追加した（*印）。次に、公立A大学各学部のAP記載内容を鈴木（2002）の項目に従って学部別に集計し、調査書の記

表 1 アドミッションポリシーの分類 (鈴木, 2002)

分類 1	学力	能力・適性														性格	態度・意欲	興味・関心	活動	多様性								
分類 2	教科学力	基礎学力	言語に関する能力				思考に関する能力						行動に関する能力															
分類 3	教科学力	基礎学力	語学力	表現力	読解力	コミュニケーション能力	論理的な思考力	問題解決能力	理解力	情報収集能力	総合分析力	柔軟な思考力	幅広い視野	独創性・創造性	リーダーシップ	持続力	実行力	企画力	集中力	人間性・良識	チャレンジ精神	批判精神	固有の価値観	目的意識	専門への興味や関心	クラブ活動	資格取得	多様な学生の受入

載傾向と比較した。さらに鈴木他(2004)による全国の大学APの項目別記載率との比較を合わせて行った。公立A大学の調査対象者の学部別人数内訳は以下の通りである。商学部 276名, 経済学部 245名, 文学部 177名, 理学部 134名, 工学部 296名, 医学部医学科 80名, 看護短大 80名, 生活科学部 129名, 合計 1417名。

3. 結果

3.1 全般的傾向

分類 1 に該当する項目としては、「性格」、「態度・意欲」、「活動」の順に多く、またこれら 3 項目でのべ記載項目総数(17337)の 8 割以上を占めた(図 1)。なお、各学部間での差異はほとんど認められなかった(図 1)。

次に、項目をさらに細分化した分類 3 に該当する項目の記載状況を図 2 に示す。上位 3 番目までをみると、「人間性・良識」が圧倒的に多く、「生徒会・委員会」、「クラブ活動」、「努力」、「資格試験」と続く。「人間性・良識」の具体的な内容を類型化し図 3 に示す。上位 3 番目までをみると、「穏やかさ」、「誠実・真面目さ」、「明るさ」の順番で続く。

3.2 学力詳細

学力に関する項目をさらに細分化した分類 3 に該当する項目の記載状況を学部別に図 4 に示す。全学部を通して基本的には「基礎学力」に関しての記述で占められていた。なお、

商学部および工学部では極わずかであるが、「教科学力」の記述が認められた。

3.3 能力・適性詳細

能力・適性に関する項目をさらに細分化した分類 2 に該当する項目の記載状況を学部別に図 5 に示す。全体としては「行動に関する能力」「思考に関する能力」の 2 項目でほとんど占められた。学部別では文学部で「思考に関する能力」の記載が約 5 割占めること、および「言語に関する能力」の記載が数%認められること。また、看護短大において「行動に関する能力」の記載が 8 割以上占めることが特徴的であった。

3.4 言語に関する能力詳細

言語に関する能力に関する項目をさらに細分化した分類 3 に該当する項目の記載状況を学部別に図 6 に示す。言語に関する能力では、学部ごとの差異が激しく認められたが、これは記載数が極端に少ないことに起因すると考えられる。したがって、これらを各学部の特徴としてとらえることには無理があると判断される。

3.5 思考に関する能力詳細

思考に関する能力に関する項目をさらに細分化した分類 3 に該当する項目の記載状況を学部別に図 7 に示す。全体としては 8 つの項目ともほぼ均等に占められるが、一部の学部に特徴が認められた。つまり、看護短大の「独創性・創造性」、および生活科学部の「理解

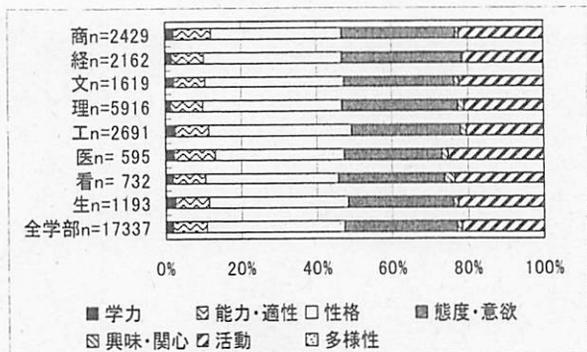


図1 AP分類1に該当の調査書への記載状況

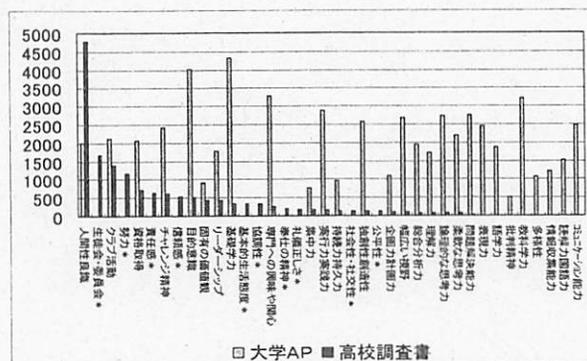


図2 AP分類3に該当する項目の記載率の比較 (*印は大学APにはない高校調査書独自の項目)

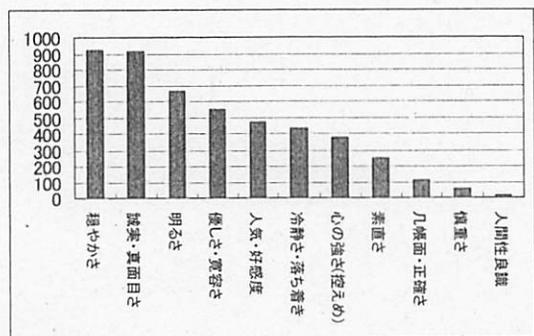


図3 AP分類3「人間性」に該当する内容の詳細

力」などである。しかし、これらも記載数がさほど多くないことから、現段階では参考程度に示すこととする。

3.6 行動に関する能力詳細

行動に関する能力に関する項目をさらに細分化した分類3に該当する項目の記載状況を学部別に図8に示す。全体としては、「リーダーシップ」が顕著に認められ、他の項目は残りをそれぞれほぼ均等に占める結果となった。

学部別では文学部および看護短大の「リーダーシップ」、商学部の「実行力・実践力」、経済学部の「集中力」が目立った。

3.7 性格詳細

性格に関する項目をさらに細分化した分類3に該当する項目の記載状況を学部別に図9に示す。全体的傾向については、3.1で述べた。学部別では各学部とも似たような傾向が認められたが、医学部で「慎重さ」、看護短大で「明るさ」が比較的顕著であった。

3.8 態度意欲詳細

態度・意欲に関する項目をさらに細分化した分類3に該当する項目の記載状況を学部別に図10に示す。この項目も各学部とも似たような傾向が認められたが、医学部、看護短大、および生活科学部が他の学部と比べ多少異なる傾向が認められた。

3.9 活動詳細

活動に関する項目をさらに細分化した分類3に該当する項目の記載状況を学部別に図11に示す。学部による差は特に認められず、「生徒会・委員会」「クラブ活動」「資格取得」の順で占められることが認められた。

3.10 学部・選抜方法別活動詳細

活動詳細を学部・選抜方法別にみた場合、特に顕著であったのは活動の項目であった。工学部では推薦入試において、他の選抜方法に比べ「資格取得」の占める割合が多いことが認められた(図12)。これに対して理学部では、すでに3.9で述べたように、いずれの選抜方法においても同じような傾向、つまり、「生徒会・委員会」「クラブ活動」「資格取得」の順で占められることが認められた(図13)。なお、工学部と同様の傾向は商学部においても認められた。

4. 高校調査書とAPの比較

全国の大学のAPの傾向(鈴木他, 2004)と今回の調査の結果を比較するために、図2に合わせて図示する。分類3の段階で記載数

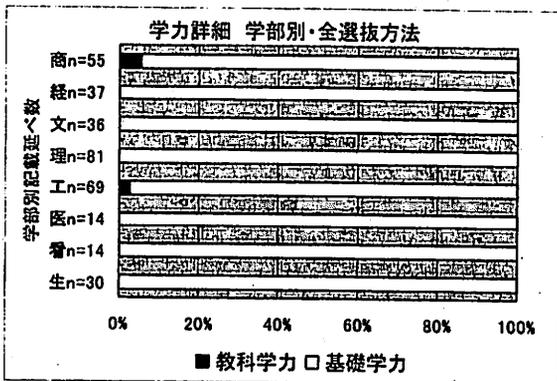


図 4 学力の詳細内容学部別比較

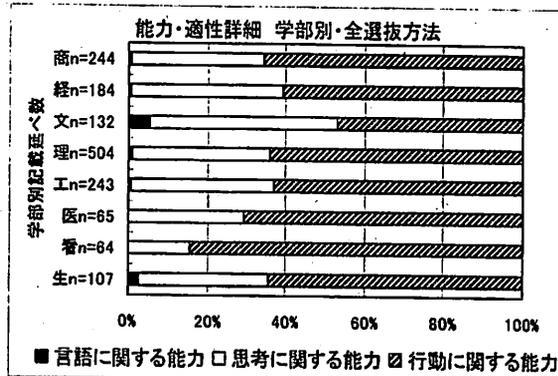


図 5 能力適性の詳細学部別比較

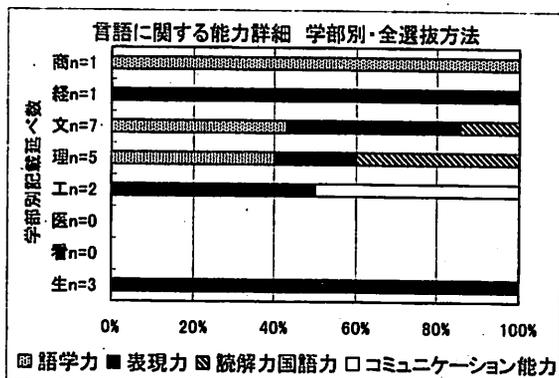


図 6 言語に関する能力の詳細学部別比較

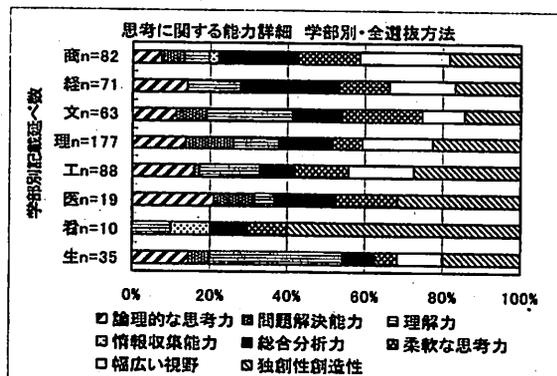


図 7 思考に関する能力の詳細学部別比較

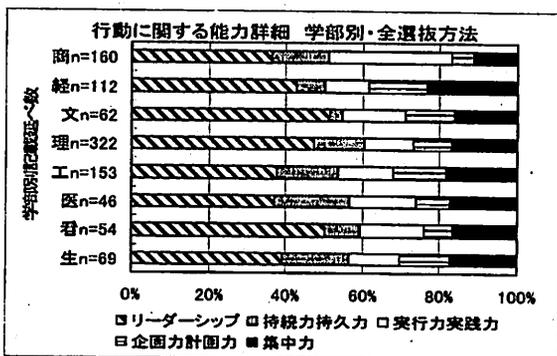


図 8 行動に関する能力の詳細学部別比較

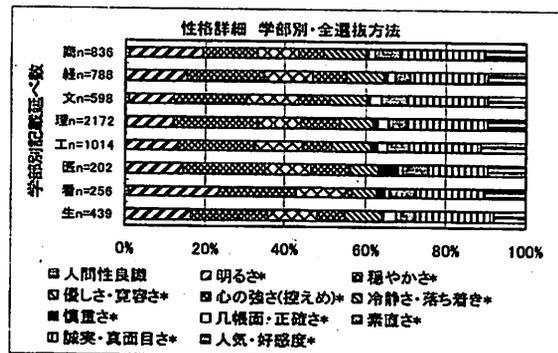


図 9 性格の詳細学部別比較

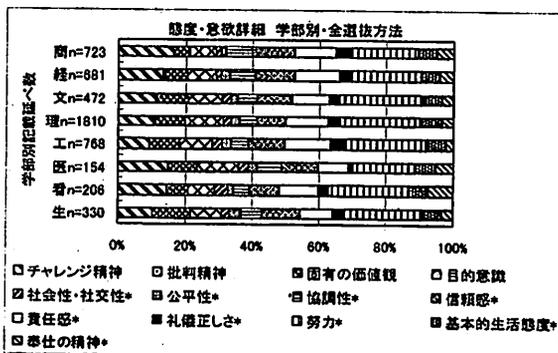


図 10 態度・意欲の詳細学部別比較

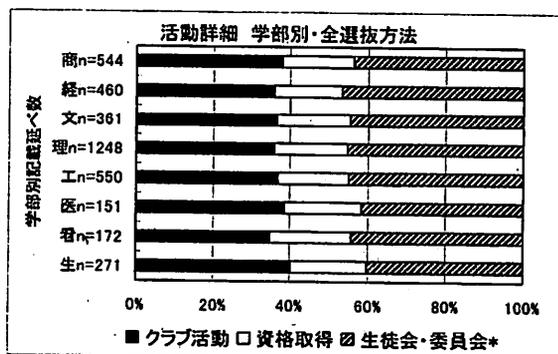


図 11 活動の詳細学部別比較

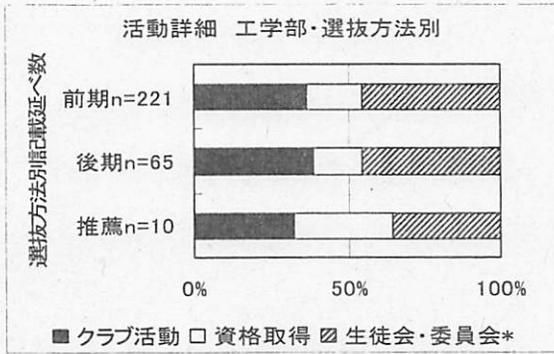


図 12 活動の詳細 工学部・選抜方法別比較

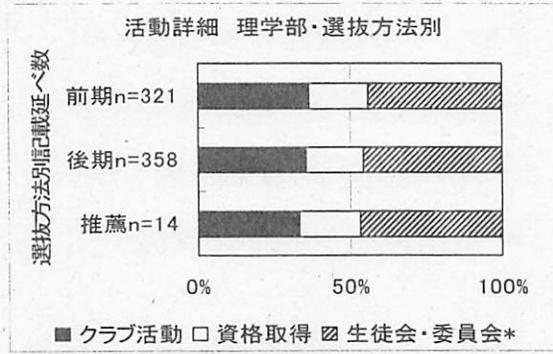


図 13 活動の詳細 理学部・選抜方法別比較

表 2 公立A大学各学部のAP項目と調査書の記載内容の比較

分類1	分類2	分類3	調査書記載数	商学部		経済学部			文学部	理学部	工学部	医学部		生活科学部	
				一般	推薦	前期	後期	後期ユニーク				医学科	看護学科		
学力	教科学力	教科学力	5	○											
	基礎学力	基礎学力	331	○		○				○	○		○	○	
能力・適性	言語に関する能力	語学力	7								○				
		表現力	9								○				
		読解力国語力	3									○			
		コミュニケーション能力	1									○			
	思考に関する能力	論理的な思考力	70						○						
		問題解決能力	37								○	○		○	
		理解力	78							○					
		情報収集能力	4												
		総合分析力	81										○		
		柔軟な思考力	67												
		幅広い視野	89						○						○
	行動に関する能力	独創性創造性	119								○	○			○
		リーダーシップ	420												
		持続力持久力	126												
実行力実践力		162					○					○	○		
企画力計画力		104													
性格		集中力	166												
態度・意欲		人間性良識	4785						○	○		○			
		チャレンジ精神	613	○	○		○	○		○	○		○	○	
		批判精神	7												
		固有の価値観	421												
		目的意識	512	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		社会性・社交性*	122												
		公平性*	116										○		
		協調性*	316											○	
		信頼感*	535												
		責任感*	639											○	
		礼儀正しさ*	185												
		努力*	1171												
		基本的な生活態度*	317												
		奉仕の精神*	190										○		
興味・関心		専門への興味や関心	244				○		○	○	○			○	
		活動													
多様性		クラブ活動	1379												
		資格取得	705												
		生徒会・委員会*	1873												
多様な学生の受入	5		○												

*印は大学APにはない高校調査書独自の項目

(率)の多い上位5位までを比較すると、高校調査書の「指導上参考となる諸事項」では「人間性・良識」「生徒会・委員会」「クラブ活動」「努力」「資格取得」が並ぶ。一方、大学AP

では「基礎学力」「目的意識」「専門への興味や関心」「教科学力」「実行力・実践力」が並ぶ。これらのことから、両者の傾向に明らかな差異があることが判明した。もちろん、学

力に関しては、調査書の別の項目として「評定」が記載されているわけであるが、このことを差し引いてもその違いは明らかである。

次に、調査対象者が実際に入学をした公立A大学各学部のAPと調査書の「指導上参考となる諸事項」を比較するために、表2に両者を図示し記載数(率)順に上位4番目まで網掛けで示した。公立A大学のAPでは、「目的意識」「チャレンジ精神」「基礎学力」「専門への興味や関心」の順で上位を占め、調査書の記載項目とは異なる傾向を示すことが認められた。

5. まとめと考察

公立A大学の高校調査書の「指導上参考となる諸事項」には「性格」「態度・意欲」「活動」に関する記述で8割方占められていることが判明した。つまり、高校側はこれら項目を重視していると推測される。また分類1では学部別の傾向に差異はほとんど認められなかった。一方、分類3では、学部別に差異が認められる場合があった。さらに一部の選抜方法、つまり商学部や工学部の推薦入学では他の選抜方法と異なる傾向、つまり高校時代の活動において「資格取得」が占める割合が相対的に高い傾向が認められた。これらのことから、高校側では調査書を記載する際、提出先学部を考慮する傾向はあまり顕著ではないが、選抜方法別では特に推薦入学において記載内容を考慮していることが推測される。

一方大学側においては、まず公立A大学では「目的意識」「チャレンジ精神」「基礎学力」「専門への興味や関心」、次に全国的大学の傾向としては「基礎学力」「目的意識」「専門への興味や関心」「教科学力」「実行力・実践力」などがAP項目の上位にならび、高校側の「期待」との間に顕著な差が認められた。

APに基づく入学者選抜という立場に立てば、少なくとも大学はAPに掲げた以上、その項目に関しては(「目的意識」や「専門への

興味や関心」等)確実に選抜方法に反映させるべきである。公立A大学ではAPの内容が必ずしも選抜方法と連動していない場合が見受けられる。このようなことが両者の「期待」の差の一因となっているのではないだろうか。当初はその策定に追われていたAPも導入7年目となった。APと選抜方法の連動も含め、高大接続の流れの中で、大学はその在り方も含めて、APを点検する時期にそろそろさしかかっているのではないだろうか。一方、調査書の「指導上参考となる諸事項」は選抜の資料として位置付けられているにもかかわらず、その機能を果たしていないことも示唆された。その位置付けも含め、調査書の抜本的な見直しが求められる。

文献

- 荒井克弘(2005)「日本の接続の問題」、『高校と大学の接続』,玉川大学出版部,38-50.
 鈴木規夫(2002)「大学のホームページ検索による分類表作成の試み」『大学における学生の入学受入方策』,大学入試センター・リサーチ・ノート, NR-01-17, 15-28.
 鈴木規夫・内田照久(2004)「アドミッション・ポリシー等に関する調査結果の分析」、『アドミッション・ポリシーと入学受入方策』,共同研究「ユニバーサル化時代における高校と大学の接続の在り方に関する調査研究(イ)」報告書,大学入試センター研究開発部, 21-42.